



学長のイスに座る

岡村甫(高知工科大学長)×小畑博貴(高知工科大学社会システム工学科)

学生時代は東京六大学野球・東大のエースとして活躍された岡村学長に突撃取材。

「自分が予測できるわけがない。笑。『まん中めがけて投げる』というのが私なりの解です。人間は皆、長所と欠点を持ってます。欠点は比較的すぐわかるんですが、長所はなかなか見えない。試合に出て始めてわかることもある。私の場合は長所を見つけてくれる人がたまにいました。『名馬と伯楽』ですね。見つけて引き出す人がいて初めて名馬は名馬なんです。そして短所は直すのは無理なことが多いんですね。球が遅いのが短所だから150キロ投げろ、と言っても無理なんです。だったらその人の短所を活かす事を考えた方がいいわけです。そうすれば短所は長所になります。長所は短所になる。欠点が欠点で無くなるんですよ。」

「野球から学んだことを研究等に適用しているんですか？」

「自分が駄目な所を知る。それでも出来るように方法論を考える。それは生きる道を見つけないことにも繋がります。野球の選手・審判・監督としての経験が人生を豊かにしてくれました。そこから学んだことを他に適用しても同じだと思うことがありました。どこか一つでも違っていたら今の自分はないと思います。」

「いつもそうやって理論付けて考えられてるんですか？」

「実はあまり考えてない。笑。ほとんど直感でやっています。結果が良ければ次に繋がります。後に精読。『質量』の話も、後に説明するために考えたものです。昔は『考えないで勘で答える』と学生によく言われたものです。なぜ良いか悪いかは後で考える。まあ、直感で9割あたりです。良く考えているやつは案外もつと外れるんじゃないかな。笑。」

「そういったことは工科大での教育にも生かされてますか？」

「工科大の学生の良さは感性に優

れている点です。これは東大にも負けない。これからは感性の時代。感性を失わなければ人に騙されない。論理に溺れると論理で騙される。感性のいい人のモチベーションを上げて長所をのばしていくと、これからの時代に有用な人材になるはずですよ。ただ、人に教える時は感性だけじゃ駄目。長嶋茂雄とか。笑。あの教え方を完全に理解した人はいないんじゃないかな。大笑。」

「ここから小畑暴走。今、僕は、自分が本当に興味を持って楽しくて、いようがない、というのを見つけた。挑戦してみたいと思ってるんですが、」

「夢を持つたら苦しい事にたえられません。夢を持つ事が出来たらこんなに幸せな事はないです。早くから夢を持つといわれる事が多いですが、夢を持つのはいつでも良いんです。私の夢に『日本のルールを世界基準に』というのがあって、それから『鉄筋コンクリートの非線形解析と構成則』というのを作りました。世界のどこにも無かった研究です。これは30才代半ばから15年かけて実現した研究です。」

「先生は今夢って持ってますか？」

「夢ですか。『工科大を世界一の大学に』というのが夢です。道は見えませんが、そのうちなんとかなるかな、と。笑。でも今の段階で、学生の持っている力をのばすという点では有数だと思えます。」

